

タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2023

成果報告レポート

助成番号 23-1-4

プロジェクト名	入院中・長期療養中のこどもたち・そのきょうだい家族を支援するネットワーク「小児病棟わくわく応援団」の立ち上げ
団体名	小児病棟わくわく応援団
代表者名	熊谷恵利子
助成額	50 万円
設立年	2023 年
URL	https://www.clinicclowns.jp/04_wakuwaku.html



(団体について)

小児病棟わくわく応援団は、「入院中のこどもたち、そのきょうだい、家族を応援したい」「スタッフのみなさまと一緒に小児病棟の療養環境を支えたい」そんな団体が集まり、ゆるやかに情報共有をし、小児病棟にわくわくを届けるために連携することを目的としています。コロナ禍、入院中・長期療養中のこどもたち、そのきょうだい、家族を応援したいと様々な団体がいろいろな形で支援活動をしてきましたが、小児病棟のスタッフや当事者に情報が届いていないということに気づき、交流のあった 6 団体が中心となって情報共有し、連携を深めることで情報を届けていきたいと考え、小児病棟わくわく応援団を 2023 年 3 月に立ち上げました。

○小児病棟わくわく応援団（6 団体）

NPO 法人キープ・ママ・スマイリング／NPO 法人心魂プロジェクト／NPO 法人しぶたね
認定 NPO 法人 難病のこども支援全国ネットワーク／認定 NPO 法人日本クリニクラウン協
会／一般社団法人星つむぎの村

(助成による活動と成果)

これまで、長期療養中のこどもたちを支える支援団体同士のネットワークはほとんどなく、各団体も必要性を感じながらもマンパワー不足などから積極的に取り組めていません。そこで、ネットワークをつくり情報共有することで、全国の小児病棟の療養環境を支えていく方法を共に検討していきたいと考え、「小児病棟わくわく応援団」を立ち上げました。6 団体同士の連携が深まり、情報共有だけでなく、気軽に相談しあい、各団体のコラボイベントを実施するなど連携を深めることができました。各団体の代表者がミーティングに参加しており、それぞれの考え方や意見をだしあい、各団体の活動や取り組み想いを聞くことがお互いの学びとなっています。

また、代表者同士が、団体の頑張りをお互いに認め、褒めあい、励ましあう時間を持つことが大切だとミーティングを重ねる中で気づきました。対面の活動が増える変化の年でもあり、忙しく疲弊していることが多い中で、同じ志を持って頑張る仲間の存在が大きな支えになっており、定期的なミーティングの場が、ピアサポート的な場所にもなっています。チラシの作成や定期的なミーティングの開催・勉強会の開催・共同イベントの交通費負担など小児病棟わくわく応援団の立ち上げを支えてくださり、本当にありがとうございました。

また、学会の活動紹介ブースで、小児病棟わくわく応援団のチラシを配布し、自分の団体以外の活動についても簡単に説明する機会もありました。小児病棟わくわく応援団をとおして、他団体を紹介しやすくなっています。今後は、さらに連携を深めるとともに、小児病棟わくわく応援団として情報発信を強めていきたいです。

(残された課題、新たな課題)

1. 情報集約・発信の必要性

小児病棟スタッフや家族へ必要な情報を届けるための工夫が必要ですが、情報発信については、各団体も兼務をしながらなのでなかなかできていない現状があります。今年度、小児病棟わくわく応援団として情報発信をこまめにしていくことは難しい状況があり、今後はどのように情報を集約し発信していくかが検討することが必要だと感じています。

2. 小児病棟にわくわくを届ける支援団体のネットワークづくり

所属団体同士の交流や連携コラボについては予想を上回る成果があったと思います。ネットワークを作ることの意味や価値を改めて感じることができました。一方で、ネットワークをつくるためには、時間と労力がかかり、ネットワークを維持することの難しさを体感しています。参加したいとう団体からの連絡もあります。今後どのように支援団体のネットワークを作っていくのがいいのか検討していくことが課題です。

3. 小児病棟にわくわくを届ける病棟スタッフとの関係性の構築

小児病棟の療養環境の向上を目指す仲間として病棟スタッフと関係をつくることが必要です。小児病棟ではスタッフが入院中のこどもたちの療養環境向上のために様々な取り組みをおこなっています。小児病棟のスタッフと支援団体がお互いのことを知る機会を作り、小児病棟のスタッフの役割や立場を理解し、小児病棟の要望に対応していく工夫を検討していきたいです。

4. 小児病棟を応援する社会的資源（外部支援団体・ボランティア・資金など）とつなげる役割

病院と小児病棟を応援する社会支援（外部支援団体・ボランティア・資金）をつなげる中間支援（コーディネーター）の必要性を感じています。小児専門病院などには、ボランティアコーディネーターが配置されていますが、多くの病院には外部支援団体をつなげる部門がありません。マンパワー不足の小児病棟が必要としている社会的資源や応援したいと思う企業やボランティアなどをつなげる役割が必要です。

5. 小児病棟わくわく応援団事務局のマンパワー不足

団体の事業との兼務のため、忙しい時期は優先順位を上げれないもどかしさを感じています。必要性を感じ、もっとやりたいこと・できることがあるのに団体の業務に追われ取り組めないこともあります。長期的に考えると中間支援的な役割や情報発信を行う専任スタッフの必要性を感じています。継続可能なためにも資金調達や運営体制なども今後の課題です。

(活動の背景・社会的課題) (団体からのメッセージ)

入院中・長期療養中のこどもたち・そのきょうだい家族を支援するネットワーク「小児病棟わくわく応援団」の立ち上げを支えてください、本当にありがとうございます。ネットワークの必要性を感じながらも、自分たちの団体の運営だけで手いっぱいという現状もあり、これまで取り組むことができませんでした。しかし、コロナ禍、改めて入院中のこどもたちや家族に情報が届いていないことを感じ、「入院中のこどもたち、そのきょうだい、家族を応援したい」「スタッフのみなさまと一緒に小児病棟の療養環境を支えたい」という想いをもった団体が手を取り合い、小児病棟わくわく応援団が誕生しました。立ち上げの部分を支援していただくことで、継続的な活動をことができ、より団体同士の理解が深まりました。課題はたくさんありますが、ネットワークの可能性を感じています。今後は、継続可能なネットワークづくりを目指し、入院中のこどもたち、家族・きょうだいの選択肢を増やしていくようにがんばっていきたいです。